



昭和42年 6 月 25 日 発行

白 鬼 屋 敷

著 者 高 木 彬 光

発行者 矢 貴 東 司

印刷者 小 泉 輝 章

発行所 株式会社 桃 源 社

〒290

東京都中央区日本橋蛸薬町1-12

電話 (666) 4001~2番

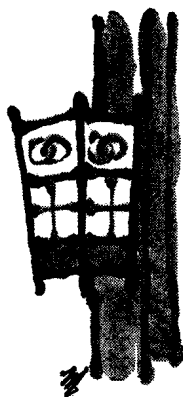
振 替 東 京 64351 番

落丁・乱丁の節はお取替え致します。

1967 ©

# 敷屋鬼白

光彬木高



<ポピュラー・ボックス>



## 目次

|        |   |
|--------|---|
| 雨の夜の狂女 | 七 |
| 黄金の銭   | 三 |
| 黒い影    | 七 |
| 見えざる仇  | 三 |
| 海賊の秘宝  | 六 |
| 若き幻術師  | 三 |
| 女賊往来   | 九 |
| 二重の手管  | 三 |
| 出合いの茶屋 | 七 |
| 悪党ぞろい  | 四 |
| 旗本切り   | 一 |

|        |     |
|--------|-----|
| 追われる身  | 一七  |
| 藪から蛇   | 一八六 |
| 鬼の住む家  | 二〇  |
| 逃がれた窮鳥 | 二六  |
| 白と黒の妖怪 | 三三  |
| 狂恋の涯て  | 三四六 |
| 黄金銭の秘密 | 二六一 |
| 死地に入る  | 二七五 |
| 百鬼夜行   | 二八九 |
| 人を呑む池  | 三〇四 |
| 白鬼屋敷炎上 | 三二八 |

白  
鬼  
屋  
敷



## 雨の夜の狂女

### 一

五月雨さみだれや名もなき川のおそろしき

蕪村ぶそんの名句が、しみじみと思い出される夜だった。

昼のうちから降りみ降らずみ、隅田すみだの水面から、霧きりのように、霞かすみのように、雲のようにひくく、ぼくでい瀬堤せでいにはい上つた水気は、そのまま晴れもせず、流れもせず、暮れてからはじめて、かすかな雨となった。

千万本の銀糸のように、五月の夜の闇やみを縫ぬって降りそそぐ雨足も、しめやかに、音もたてずに土手の赤土を濡らすばかり、夜に入つてからは、土手の人通りもぼつたりとだえてしまった。

なんとなく、陰々滅々いんいんめつめつたる夜だった。幽霊幽霊というものが、ほんとうにあるものなら、その出現にはこれ以上絶好の舞台ぶたいはなさそうに思われる。いま、むこうから、土手の上を、ふわりふわりと泳ぎながら、こちらへ近づいて来たかすかな燈も、鬼火の光ではないか？

いや、それは入山形の定紋を打った提灯だった。桐油をしいた合羽に饅頭笠の若い男が、道案内をつとめるように、一組の男女の先に立って歩いて来たのだ。

女は蛇の目、紹縮緬の単衣に白献上の博多帯、一目でふるいつきたくなるような年増である。俗に夜目遠目傘のうちともいうくらいだし、淡い光に目尻のかすかな陰をたたえて、浮世絵から抜け出して来たような仇つぼさ。

それにくらべて、男の方は一目で禄にはなれた浪人と見える姿。羊羹色になりかけた黒紋付に傘もささず、懷手で女の後からついて来るところを見ると、この二人、夫婦でも好いて好かれた仲でもなさそうな。

「やんなつちまうねえ。このお天気つたらどうだい。これで十日——ろくにお天道さまの顔をおがんだこともありやあしない」

じれつたそうに女がいつた。何か疳にさわつたことでもあるのか、妙に調子がかん高い。

「全く姐御のいうとおりだ。こちとらのような商売には、雨だろが天気だろが、たいした違いはなからうが、堅気の衆には因果な雨だ。俗に、土方殺すにや刃物はいらぬ、雨の十日も降ればいいと申すが」

深みのある澄んだ声で、年にも似あわず、えらく悟りすましたような口をきいたのが、いよいよも

つて、女の瘡にこたえたのか、

「なにいつてんだい。こつちだつて、まんざらかわりがなくはないんだよ。先生みたいな居候的には、世帯を切りもりすることちの苦勞はわかんないだらうけど」

男は懷から手をぬき出し、五分月代をびしやりとたたいた。

幫間、たいこもちのようなしぐさも、豪快な笑いをともなっているために、ちつともいやみに見えないのが、浪人とはいえ、やはり身に備わつた人徳とでもいうものだらうか。

「ははははは、たしかにこれはやられたが、まあ、そのようにおつしやるな。なるほど日頃はただこうして、ぶらぶらむだ飯を食っているようだが、なに、この神崎安兵衛もまんざら酒にくらい酔っているばかりのでくの棒でもないつもりだ。いまに一朝事があつたら、姐御をあつといわせるような働きをお目にかけてようて」

「そりやあ、あたしも先生の腕を買っていないわけではないんだけど……あんまり口がわるいもんだから、つい、よけないいやみもいいたくなるのさ」

「無理もない。今夜の博突には減法目が出なかつたからな。盆ごぞの上で骸子の目から生まれたといっている弁天のお妙姐御が、丁と張れば半と出る。半に賭ければ丁に転んで、見る見るうちに二十両がとこふんだくられた時には、こいつは三日ぐらい、お天気も悪いだらうと覺悟をきめた」

弁天のお妙——といえは、江戸では一応通つた名前だ。大名小名旗本の屋敷へ、女中たちの奉公の口入れをしている人入れ稼業、津乃国屋喜平の女房で、自分でも一かどの女俠氣どりの女のはず。神崎安兵衛というのは、いずれその家に転りこんでいる浪人の用心棒だろう。こういう話の調子から察するに、お妙は亭主の名代でどこかの賭場へ出かけて行き、ほとんど裸にされかけて、ぶりぶりながら帰る途中らしい。

「如御！」

突然、提灯を下げている若い衆の与吉が、腸のはりさけるような胴間声で叫んだ。

「幽霊、女の幽霊が、あれ、あそこに！」

## 二

幽霊——といわれて、この二人も、さすがにぎくりとしたように立ちすくんだ。

無理もない。土手の柳のかげに一人、わかい女がたたずんでいる。うなだれて、死神にでもとりつかれたように、じつと暗い河面を見つめているその後姿は、気のせいかな、奇妙に影がうすいのだ。

まさか、本物の幽霊ではあるまいが、今にも身を投げようとしているのかも知れない。

「先生、あれは？」

「うむ」

刀の柄に手をかけて、安兵衛はじつと闇の中をうかがっていた。この話声が耳に入つたのか、それとも提灯の光が目に入つたのか、女は静かに後をふりかえり、宙を飛ぶような足どりで、三人の前へ歩みよつて来た。

「あの、ちよつとおたずねいたしますが、ここはどこなのでございましょう?」

苦しそうに、一言一言、腹の底からしぼり出すような声でたずねた。

「どこつて、ここは大川の土手さ」

「大川と申しますと、大きな川でございますか?」

話の調子が、最初から全然はずれてしまつてゐるから、お妙も目を見はつて、

「なんだねえ。お前さんはいつたい何年江戸に住んでるんだい。大川——一名隅田川さ」

「隅田川……それで、駿府へはどう参つたらよろしゅうございますかしら」

「駿府!」

お妙も思わず声をあげた。駿府といえはいまの静岡。箱根の関を越えてから、さらに二日の道のりなのだ。このあたりで二、三丁先の米屋でもたずねるように、道をたずねる方がどうかしている。

「どうしてまた、そのなりで、そんなに遠くまで」

とつぶやきながら、お妙はもう一度相手の姿を見つめた。

二十にはまだ間がありそうだが着ているものも粗末な浴衣だし、その上そば降る雨に濡れ、ぐるぐる巻いた髪もなんとなく汚らしい。

「いつたい、また、どうしてそんな無茶なことを——」

といいかけたとき、目の前の闇の中に、闇よりも濃い黒い人影が浮かび上った。

形もはつきり見えないうちに、ひくくおしつぶすような声が聞こえてきた。

「もう、それ以上なにも聞くな。なにもいうな。その女にはこつちの方が先に座敷をかけたのだ」

闇の中から、歩み出て来たのは、全身目だけを残した黒装束によそおつた誰とも知れぬ怪人だった。

「よけいなお節介はせぬがよい。お妙とやら、その女にかまうのはよしにして、手前の頭の蠅でも追つたらどうだ」

「お前は？」

「このとおり、人目を包むしのび衣裳、名前は誰と名のれぬが、この女にはいささかゆかりの者と思つてもらおうか」

相手は腰の刀の柄に手をかけ、いまにも切つてはなたん構えだつた。めつたなことではものおじも

しないお妙も、今度ばかりは恐れをなして、女を後にかばいながら、

「神崎さん、だまつて見ていないで、このお方になんとか挨拶しておくれな」

と救いを求めた。

「心得た。拙者がむだ飯食いでないという証拠を見せるには、この上もない機会だな」

神崎安兵衛はにたりと笑つて、一、二歩前へ進み出ると、

「おう、黒いの、お前はこの女の兄貴か亭主か知らねえが、窮鳥懷に入れば獵師もこれを殺さずという諺もあることだ。ましてこつちの弁天の姐御は、女ながらも江戸では名を売っている体、女を渡せとつめよられて、はい、さようでございますかと、返事のできるものじゃねえ。渡されねえといつたらどうする？」

ふふふとひくい含み笑いが、黒覆面の中からもれた。腕にはよほど自信でもあるのか、

「刀にかけても、つれて行こう」

「刀にかけて——面白い、そう来なくつちや話にならねえ」

朱にまじわれば赤くなつて、言葉はすつかり崩れているが、さすがに安兵衛の抜いた太刀には少しの乱れもなかった。

「さあ、来い。来やがれ」

「神明無想刀流か？」

黒装束の口からは、とたんにこういう言葉がもれた。

神明無想刀流といえ、むかし東下野守元治によつて編み出され、その後、高弟田宮對馬守重正にうけつがれたという劍法。ただ、その流派にはしかるべき後継者もなく、廃絶したといわれているが、一介の浪人、神崎安兵衛が、そのような秘劍をきわめているというのも不思議なら、この黒装束がひと目でその流派と見やぶつたのも、さらに不思議なでき事だつた。

神崎安兵衛も、愕然としてしまつたように、

「やい、そこまで知つていやがるとは、手前はいつたい、どこのどいつだ！」

### 三

その間に、黒装束もさつと刀の鞘をはらつた。

二人の腕にはおそらく、それほどへのへだたりもないのだろう。もちろん、真劍白刃の勝負では、わずか髪の毛一筋ほどの腕の違いが、たちまち何百倍何千倍かに拡大されて、生と死とを分つ三途の川となるものだが、二人とも最初刃をあわせた瞬間に、相手の腕前を見ぬいたのか、容易ならぬ強敵と思つたように、どちらからもあえて仕かけようとはしなかつた。

日頃豪放大胆な安兵衛も、今は口をきく余裕もなくしてしまつたよう。相手も、それに応ずるよう  
に、気合もかけず、ただ大きく肩をはずませながら、あらい呼吸をくりかえすばかり。ただ、時々  
やりんちやりんとふれあう二人の切先が、この無言の決闘に伴う必死の間答だつた。

お妙も思わずかたずをのんだ。

声はなくても、その場に流れる凄惨な殺気から、これがなみなぬ死闘だということは、直接皮膚  
に感じられた。

いつの間にか、相手にたたきつけてやるつもりで、足もとから目つぶしのつぶては拾つておいたの  
だが、それをたたきつけた瞬間に、相手がどういう変り身に出て来るだろうと思うと、容易に手出し  
もできなかった。

「与吉、近くの自身番へ！」

「へえ、姐御、合点です」

さつきから、逃げ出したくて足がうずうずしていたらしい与吉は、とたんに提灯を投げ出すと、宙  
を飛ぶような足どりで、もと来た方へかけ出して行つた。

地に投げ出された提灯は、一瞬めらめらと燃え上つて、水入り直前の相撲のように微動もしない二  
人の姿を照らし出したが、それも束の間、その後は全くの闇試合。